慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「こびとたち」の世界 : ハロルド・ピンターの側面
Sub Title	An introduction to Harold Pinter
Author	鈴木, 周二(Suzuki, Shuji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.16, (1963. 10) ,p.80- 92
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00160001-0080

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「こびとたち」の世界

―ハロルド・ピンターの側面―

鈴木周二

〔Ⅰ〕

ハロルド・ピンターは結局、イギリス演劇の主流とはならないであろうと云う見方がある。これはピンターだけについてのことではなく、オズボーン、ウエスカー、シンプソン等も含めてのことである。彼等「新しい波」の劇作家達は、やがて次の更に新しい波によって洗い流されるであろうし、結局最後に残るのは、伝統的な技法で書く劇作家達であろう、と云う見方である。(1)

それとは別に考えても、エリザベス朝以来の伝統が長くて、確立しているイギリスでは、これら「新しい波」の劇作家達が現在必ずしも劇壇の主流を成しているとは言い得ない。ロンドンの劇場において上演されているものをみても、古典劇、或は古典的技法で書かれた劇の占める比重は、はるかに大きいのである。まして彼等新進劇作家達の活躍が将来どの様に評価されるかは、寄せては返す歴史の波に洗われてみた後でなければ、分らないことである。

しかしそれにも拘らず、オズボーン、ウエスカーと並んで現代の三人の主要劇作家として注目され、(2)最近もっとも活躍している、そ

してもっとも活躍を期待されている者として、ピンターを除くわけにはゆかない。彼は三人の中でも最も技法的に完成され、オズボーンやウエスカの作品の場合の様な意味ではへまをやることがないのである。[3] ベケット等の影響を受けつつ、更に独自の演劇形態を発展させ、旧来の演劇形態が失いつつあった観客を、再び劇場にとり戻すのに力を貸しているのである。[4]

そのピンターの書いた九つ[5]の劇の中で、ラジオドラマ「こびとたち」(The Dwarfs) が優れた作品であるかどうかは、疑問の余地がある。これが放送された時には、替否両論を大に引起したものである。[6]

ただはっきりと言えることは、これがかなり難解な作品であると云うことである。ピンターについて深い理解と暖かい厚意を示しているエスリン (Martin Esslin) やティラー (John Russel Taylor) でさへも、共にこの「こびとたち」は難解なものであると認めている。[7] ピンター自身も、「結果は聴取者達には全く理解出来ないものであったかも知れない。しかし私自身には理解、説明の出来ないものではなく、それは非常に価値のあるものであった。[8]」と述べて、その難解性をある程度は認めているのである。しかし同時に、それは彼にとって貴重なものであったとも言う。どう云う点を指してそう言っているのであろうか。

彼の他の作品と共通な要素、あるいは全然他の作品には見られない様な要素と云った面からこの劇を考え、難解と云われるものを解きほぐしてみよう、そしてピンターにとって貴重であったのはどんな点なのか探ってみよう。そんなところからこの小論は出発する。

〔Ⅱ〕

ピンターの劇の中で最も著しい特徴の一つは、他の作家の劇では当然示される様なことが示されないことである。舞台で起っていること、その出来事に関連している人々の現在及び過去の相互関係。こう云ったものは、ピンターの劇では殆んど説明されない。従って我々は、丁度通り合わせた路上で、他人の喧嘩を見ている様なものである。喧嘩の原因も、その当人たちの事情も知らないままに。あたかも、今日の一般の人々の生活の背後にひそむ不確実さ、曖昧さそのものを示されている様に。その不確定な様子が、かえって意外な真実さをもって、生々とした像を我々に与えているのである。[9] それが彼の劇に何とも云えない共感を引起させるのである。

ところが「こびとたち」では、登場する三人の人物の関係は比較的よく説明されている。レン (Len) とピート (Pete)、レンとマー

ク（Mark）とのそれぞれの関連において。こびとたちの行動も、レンの口を通じて一応具体的に語られる。

レン「こびとたちは屋根のといに集り、自分達の懐中時計をつくる。チョーク色の顔をした一人は、日中のかすをごみ箱に棄て、ふたの上に座る。食べてはいないのだけれど、彼は咀嚼を始める。」（P. 102）

レン「こびとたちが去るとねずみが入ってくる。こびとたちが休日をとれば、ねずみも休む。」（P. 104）

しかしそれにも拘らず、あるいはそれ故に、我々はますますこびとたちの世界から離れてゆく、結果はますます曖昧になる。[10] こびとたちの世界はそんな世界なのだ。

ピンターの劇では、「部屋」（The Room）の様に、動機も何も説明されないで、すべてが曖昧なままに残るものと、この「こびとたち」の様に色々と説明を与えられても、その説明が必ずしも理論的なものではなく、雰囲気的なものであるためにかえっまた曖昧なままに残るものに範囲が拡がっている。

その中間にあるのが、「管理人」（The Caretaker）や「夜遊び」（A Night Out）と云った作品である。それらはピンターの作の中では非常に人間臭い劇で、一般普通の社会に比較的近い要素を持っている。結局こういった中間的なものを手探りの道具にして、そこから両端へ向っての理解を進めるより仕様がないのであろう。

〔Ⅲ〕

ピンターは以前に俳優としての生活を送りつつ、同時に劇ではなく、詩を書いていた。そして又小説も。自伝的なものであった。しかし小説は期間が長い間にまたがり、文体も統一することが困難であった。その題材は舞台劇にするのにもふさわしくなかった。しかしラジオドラマ「こびとたち」を書く機会に恵まれた時、それは全くふさわしい題材となった。ラジオと云う機能が、それを有効に果してくれたのである。そのもとの自伝的と云われる小説の題も、「こびとたち」（The Dwarfs）であった。[11]

時間の経過も、場所の移り変りも、一瞬の沈黙状態がすべて示してくれた。舞台の大袈裟な転換をしなくても、マークの家からレンの家へと、そして又病院へと、一瞬の沈黙状態が容易に運んでくれるのである。ありふれた日常的な会話から、意識の流れを述べる独

白に移ることも、またそれから平凡な会話へと戻ることも、容易であった。やはり一瞬の沈黙状態を設ることによって。

このラジオドラマで意識の流れを独白するのがレン、日常会話の相手がピートとマークである。このレンとピート、あるいはマークとのやりとりは、しばしば意志の疎通を欠く。

レン「ピート。」

ピート「なんだい。」

レン「一寸こないか。」

ピート「なんだい。」

レン「このレコーダーは、どうしたんだろう。調子が悪いよ。」

ピート「お茶にしようか。」

レン「うまくゆかないんだよ。」(P. 91)

と云った冒頭の部分からもうこの調子である。こう云った適正な応答をしないと云う場面は、ピンターの作品にしばしばみられるものである。「管理人」のディビス(Davies)とミック(Mick)のやりとりもそれである。

ミック「よく眠れたんだろうね。」

ディビス「おきき。私は君が誰なのか知らないんだ。」

ミック「どのベッドで眠ったんだい。」

ディビス「ねっ、いいかい——。」

ミック「どうなんだい。」

ディビス「あれさ。」(P. 33)

こう云う、ちぐはぐな会話は、「こびとたち」の中では何度も現れる。これはレンの頭脳が狂っているからなのであろうか。あるいはピートやマークの側に何か理由があるのだろうか。

ロジャー（Ian Rodger）は、伝達の不充分と云う主題は本質的に知的なものであるのだから、少くとも正常な人物によってなされるべきであると云う様なことを言っている。[12] これに対してマロウィッ（Charles Marowits）は、ピンターの場合伝達が充分に行われないのは、より大切な主題を探り求めるための、一つの技法に過ぎないと言っている。[13] その主題は、ある場合には日常生活にひそむ何か分らないものに対する恐れであったり、また時には愛と認容の必要が問題となる。そんな時に、その主題をより適確に、効果的に表現するために、人物間の伝達が充分に行われないと云う技法を用いているのである。

この「こびとたち」の場合も、やはりこの伝達の不充分は、この劇の主題そのものではなく、むしろ主人公レンの住む世界を強調するためのものであろう。ある意味ではレンは、「管理人」のアストン（Aston）、「誕生日パーティ」（The Birthday Party）のスタンリー（Stanley）と同一の系譜をなしている。[14] 彼等は幻覚の世界に住んでいる。しかし幻覚の世界が必ずしも狂っているとは限らない。見方を変えれば、その方が正しい世界かも知れない。レンは言う。「濁った空気でも、全然空気が無いよりはましだ。(P. 94)」ピートやマークの世界には、空気が全然無いのかも知れない。あるいはどちらの世界も、それぞれの段階において濁っているかも知れないのである。

こびとたちが現れ、活躍するレンの世界。しかし我々はそこでこのこびとたちの声を聞くことも、姿を見ることも出来ない。我々が聞くことの出来るのは、ピートやマークの世界と同じレンの声のみ。結局彼等三人が属しているのは、同じ一つの世界であって、それを支配しているのが、こびとたちかも知れない。[15] ピンターはそんな世界をつくりあげたのである。

〔Ⅳ〕

一体人は、他人に本当のことを語るものだろうか。誰でもが自分の事は知らせないで、他人のことはちょっとした事でも知りたいと思う傾向があるのではなかろうか。自分に関係が無いとなると、実際に行動は共にして呉れないけれど、人は他人の事に大に興味を示す。そして自分が知ったことを、更に他の人々に知らせる。たとえそれが、その話題とされた人には致命傷となる様な、ひどい誹謗であっても。

ピンターの劇では真実を語るのは、幻覚の世界に住む者達だけである、とティラーは言う。[16] 確かに、ピンターの幻覚の世界に住む人々は、自分の幻覚に強くひきつけられていて、余計なものが介在しないと云う点で、現実の世界の者よりは意識的な嘘はつかないかも知れない。レンは言う。「僕は何もつつみ隠すことが出来ない。どんなことでも、とって置くことが出来ないんだ。(P. 106)」

しかし、だからと云って、彼等の語ることが必ずしも真実ばかり、害のないものばかりとは限らない。散文の場合と同様に、詩にも真実を伝える場合と、詩的真実をつくるための虚構をもうける場合がある。幻覚の世界にもそれが言えるであろう。幻覚が実際の世界と接触する様なときには特に。その場合には、かえって幻覚ゆえに、やはり他人を傷つけることを、口走ることもあるものだ。「こびとたち」のレンがそれである。その点では彼は、アストンやスタンリーの系統よりも、むしろ「管理人」で云えば、ディビスの役割を果しているのである。

ピート「どうしたんだい。」

レン「病気だったんだよ。」

ピート「病気だって。どうしてなんだい。」

レン「チーズさ、腐りかけたね。結局それが祟ったのさ。ずーっとチーズを沢山、食べてるんだよ。」(P. 108)

とこんなやりとりがあった後で、レンは今度は、マークに話す。

レン「ピートはあんまり沢山、チーズを食べ過ぎたんだよ。そのおかげで病気なんだ。」(P. 112)

これは明らかに、話のすり替えである。このレンの場合には、ピートを中傷しようとする意図はないかも知れない。しかし彼は更につけ加えて、マークに言うのである。「ピートは、君が馬鹿だと思っているよ。」こうなれば、結局は明らかである。少くとも結果的にはピートを陥れることになり、ピートとマークの仲を、疎遠にさせるのである。

「管理人」のディビスの場合は、それがもっと意識的である。アストンに拾われて、兄弟の部屋に住まわせて貰っている彼は、最初ミックとはしっくりしない。それが二週間もたつと、彼はミックに、アストンについての不平を色々と訴える。アストンが話をして呉れない、時計が無いので不便だ、自分がうなり声を発すると云って真夜中にたたき起されるのが迷惑だ——等々と。アストンが彼のた

めに拾ってきてくれた靴も、彼にはたまらない。黒い靴に茶色のひも。しかし、それは他のがみつかるまで我慢すると言う。より良いものがみつかるまでは、不満足ながらそれで我慢するのである。この点なども、なかなか示唆に富んでいる。

私はこのディビスと云う男は、若しあるとすればこの劇の中心人物で、あるいはピンターも、最も興味をもって登場させているのではないかと考える。ディビスの特質は「万人的」と云うことに尽きる。ピンターは、「自分は象徴などは考えない[17]」と言っている。従って、このディビスも、人間性の何かを象徴していると考える必要はない。彼自身が人間なのである。万人的性格そのままなのである。

さて、その彼がアストンから遂に出ていけと言われる。

アストン「もうそろそろ、どこか他の所を探した方が、よくはないかい。ぼくたちはもう、反りが合わない様に思うから。」

ディビス「どこかほかを見つけろだって。」

アストン「そうだよ。」

ディビス「私がだって。私に言ってるんだね。とんでもない。君の方こそだよ。」(P. 71)

厚かましく逆襲に出るけれど、それはアストンには通じない。そこで彼は、今度はミックにとり入って、一緒にやってゆこうと誘う。しかし彼のはったりも、その内に皮がはげる。遂にミックから、「君の言うことは、何も言葉通りには受けとれないよ。(P. 77)」と決めつけられる。

そこで今度は、もう一度アストンに話を持ちかけてみる。しかしアストンは、最早どうしても承知する筈がないのである。このディビスの性格が生々しく躍動する「管理人」の第三幕は、ピンターの中でも最も優れたもの、更には「新しい波」の劇作家達の作品と較べても、最高の出来であると、私は思う。

それはさておき、この様にみてくると、レンの言動は意図は不明であるが、結果においては正にディビスのしようとした事と、同じである。結果が同じであるから、同じ類の人間であるとは言えないかも知れない。しかし幻覚の世界に住む者が、いつも純粋であるとも言えない。結局は人間の世界である。ピートやマークの世界と同じ次限に属するのである。それを支配しているのが、こびとたちの

世界。「こびとたちは時をうつさずその場へやって来、危険地帯を巡る。任務が終るまで、仕事を止めない。(P. 100)」我々がその声を実際に聞き、その動きを目の前に見ることの出来ない世界である。それこそが現実を超越した、幻想の世界なのではあるまいか。ラジオを媒介とすることによって、始めてつくることの出来た、ピンターの一つの世界である。

〔V〕

さて今度は視点を変えて、ピートとマークの二人の側から考えてみよう。二人ともレンの友達である。勿論二人とも、互に相手を知っている。ただしこの劇では、二人だけで話をするのは、終末の部分でレンを病院に訪問するその前と後の場面だけである。その他の場面では、一方の話相手はレンで、その場合にしばしば、もう一方の者のことを話題にするのである。

レン「君は殺人狂だよ。」

ピート「いいや。それはマークの方だよ。」(P. 95)

あるいは、

ピート「マークは、君のためには何の役にも立たないよ。君と僕の間では、彼なんかほんのやくざものさ。」(P. 99)

と云った調子でピートは語る。それに対し、マークの方でも、

マーク「君はピートと、一緒に時を過しすぎるよ。」

レン「なんだって。」

マーク「少し間を置いたら。彼は君のためには、何の役にも立たないよ。」(P. 102)

と云った調子で、相手よりも自分をより良く売り込もうとする。あるいはこんな関係こそが、ピンターのもとの自伝小説で何とか表現したかった事かも知れない。その対象が、レンの様な一見何の価値の無い様な者であろうと、あるいは何か他の重大な利害関係を持つものであろうと、その根本の動機には変りがない。こう云ったピートとマークとの関係こそが、問題なのである。このピートとマークの二人は、互に相手よりも自分の方をより良く思われ様と売り込みながら、その当然の結果として、対象となったレンの世界を侵すこ

とになるのである。この二人はレンの世界への侵入者なのである。[18]

この二人と同じ様な関係を示しているのは、「誕生日パーティ」のゴールドバーグ（Goldberg）とマッカン（McCann）の二人である。彼等は裏口から、しのび込む様に入って来る。芸術家スタンレーの、今は一応安静な、孤立した世界へ。そして最後には、スタンレーをどこへともなく連れ去ってしまう。あたかもピートとマークが、レンを病院へ送り込む様にしてしまった様に。ゴールドバーグ等二人は、止めようとするペティ（Petey）に、

ゴールドバーグ『一緒にいらっしゃいませんか、ボールズさん。』

マッカン「そうだ、一緒にいらっしゃいよ。」

ゴールドバーグ「一緒にモンティへいらっしゃい。車にはまだ、余席がありますから。」（P. 90）

と言ってひるませる。そして出かけてしまう。正に彼等は芸術家の世界に侵入してくる、社会の代表である。[19] こういった二人組は、あるいは典型的な、ピンター劇の登場人物と言えるかも知れないのである。[20]

幻覚の世界とか、芸術家の世界とは意味が異るかも知れが、温和な家庭と、それを代表している落ちついた部屋へ侵入してくる人物は、ピンターの作品によく登場する。「部屋」の場合には、ローズ（Rose）の唯一の避難所とも云える彼女の部屋へまぎれ込んでくる男女の空部屋探しの二人。そして強引に彼女の世界にまで侵入し、彼女を暗闇の世界へ導いてしまうライリー（Riley）と云う盲目の黒人。「疼き」（A Slight Ache）では、エドワード（Edward）とフローラ（Flora）の老夫妻の居間へ入って来て、エドワードと地位を替えてしまう、マッチを売らないマッチ売りの老人。

その中で、「ダム・ウェイター」（The Dumb Waiter）のベン（Ben）とガス（Gus）の二人の殺し屋は、「こびとたち」のピートとマークの関係に最も近い。ベンとガスは、地下の部屋に待機して、本部からの指令を待っている。二人は同一の任務を持っていながら、例によってピンター的に、話はしっくりとは伝わらない。

ガス「〝一流の十一人〟。クリケット選手たちか。見たかい、ベン。」

ベン「何を。」

ガス「この一流の十一人だよ。」
ベン「何だって。」
ガス「この一流の十一人の写真さ。」
ベン「一流の十一人って何なのだい。」
ガス「それは書いてないな。」
ベン「お茶はどうなったんだ。」
ガス「どうもみんな老けてみえるな」（P. 127）

この劇の、伝達不充分と云うピンター的技法は、後に起るなにものかを、予め示しているかの如くである。ガスが水を飲みに出ていった後で、ベンは遂に指令を受取る。それは次にそこへ入ってくる男を殺せ、と云うものである。そこへ入ってくる男、それが外ならぬガスなのである。最初は同じ目的を持ち、それに向って共に行動している。些細な話のくい違いも、二人にはそれ程大したことには感じられない。それがひとたび事情が変れば、友達であろうと、先程までの味方であろうと、攻撃をしなければならない二人。ある一人が考えていること、それが相手には適確には伝え難いこと、あるいはそれが殆んど不可能であること。ピンターが常に葉味をもって、描いていることではある。がここではむしろ、人生は、互に相手を攻撃し合うべく、一見緊密そうに、しかし実際は曖昧に結びつけられた二人の人物の様なものである――そんなことを、ピンターは考えているのかも知れない。[24]

その点では、ピートとマークの関係も正にそれである。二人とも、互にレンに向って、他方とつき合うことを止める様に勧める。レンの手には負えない相手ではあるが、自分ならそれをあしらうことが出来るのだ、と互に思っている。ピートもマークも、互に自分ならその相手とつき合ってゆけると、考えていたのである。ところが、自分のことをピートが馬鹿だと思っていると、レンから知らされた、あるいは告げ口された時のマークのうろたえた様。それこそ人間そのものである。

マーク「君は僕のことを、馬鹿だと思っているな。」
ピート「僕がそう考えているだって。」

マーク「君はそう考えているんだ。僕のことを、馬鹿だと思っている。」
ピート「君は馬鹿だよ。」
マーク「ずーっとそう考えていたのかい。」
ピート「始めからさ。」
マーク「君は僕をずーっと、そそのかして来たんだ。」
ピート「君の方こそ。」(P. 115)

人はこの様に、他人の自分に対する評価を、気にするものである。ピンターの劇で起ることは、何か並外れたことであるけれど、それは正に世間で起ることに対応しているのである。[22] 社会の沈んだ面を多く取扱うけれど、それが実際の一般社会と、複雑にからみ合っているのである。[23]

エドワード・アルビー(Edward Albee)も、丁度そんな一面を、ちらりと書いている。「動物園物語」(The Zoo Story)のジェリー(Jerry)は、非常に個性の強い、他人の思わくなどは気にしない男である。自分の思ったことを、一方的と思われる程強引に、語って聞かせるのである。それがふとこんなことを尋ねる。

ジェリー「ピーター。あなたは私をうるさいと思いますか。あるいは、わけの分らない奴だと。」
ピーター「いやー、実はこんな午後になるとは、思いませんでしたがね。」
ジェリー「と云うと、私は、あなたが期待していた様な人物じゃあなかったと云うわけですね。」(P. 134)

これなどは、ジェリーの内面を、突然ちらりと見せられた様で、我々は一瞬とまどう。むしろ劇の流れを損ねる心配もある様な言葉である。とにかく人間と云うものは、他人の評価が気になるものである。自分はそんなことはない、と言う様な人に限って特に。意外なところで、アルビーのピンターに対する類似を見せられた様な気がする個所である。

「こびとたち」は、こう云ったピートとマークの間の、非常に人間臭い会話とは一瞬の沈黙を置いて、レンの独白で終りをつげる。今や彼は、こびとたちからも見棄てられる。レンには彼等の言葉も聞えなくなる。

レン「彼等が唖になったか、私が聾になったかだ。あるいは彼等が聾で、私が唖に。あるいは誰も唖や、聾ではない。そうすると、これは純粋に単純な陰謀だ。」(P. 116)

彼のまわりにあるのは変化のみ、すべてが清潔で、洗われている。芝があり、繁みがあり、花がある。ピートやマークの世界ではない。こびとたちも語りかけない。完全に彼一人だけの世界である。

(一九六三年　夏)

〔付記〕「イギリス新進劇作家研究〔II〕Harold Pinter」を、近く「日吉論文集」に発表の予定です。従って、ピンターについての色々な事実、その全体的な展望、及び Bibliography 等は、すべてそちらに譲りました。

TEXTS

(1) Harold Pinter: *The Birthday Party and Other Plays* (Methuen, 1960)
The Birthday Party pp. 7~91.
The Room pp. 93~102.
The Dumb Waiter pp. 121~159.

(2) Harold Pinter: *The Caretaker* (Methuen, 1960)

(3) Harold Pinter: *A Slight Ache and Other Plays* (Methuen, 1961)
A Slight Ache pp. 7~40.
A Night Out pp. 41~88.
The Dwarfs pp. 89~116.
Revue Sketches pp. 117~134.

(4) Harold Pinter: *Three Plays* (Grove Press, 1962)
The Collection pp. 41~80.

(5) Edward Albee: *The Zoo Story and Other Plays* (Jonathan Cape, 1962)
The Zoo Story pp. 111~142.

NOTES

(1) Donoghue, Denis. "The Play of Words", *The Listener*, July 12, 1962, p. 56.

(2) Marowitz, Charles. "Oh Mother, Is it Worth it ?", *Theatre Arts*, May, 1962, p. 21. 及び Williams, T. "Williams on Williams", *TheatreArts*, Jan., 1962, p. 18.

(3) Worsley, T.C. "A New Wave Rules Britania", *Theatre Arts*, Oct., 1961, p. 19.

(4) Wain, John. "Conflict of Fomrs in Contemporary English Literature", *Critical Quarterly*, Spring, 1962, p. 20.

(5) 初出の texts 中から The Revue Sketches を除き、Night School を加えたもの作品。その他に、最近 The Lover と云うテレビドラマを発表している。 (cf. *Plays and Players*, June, 1963, p. 41.)

(6) McWhinnie, Donald. *From the Fifties* (B.B.C., 1962), p. 96.

(7) Esslin, Martin. *The Theatre of the Absurd* (Anchor Books, 1961), p. 215.
Taylor, J.R. *Anger and After* (Methuen, 1962), p. 255.

(8) Pinter, Harold. "Writing for Myself", *The Twentieth Century*, Feb., 1961, p. 175.

(9) Worsley, T.C. *op. cit.* p. 19.

(10) Taylor, J.R. *op. cit.* p. 258.

(11) Pinter, H. *op. cit.* p. 173.

(12) Redger, Ian. "The Moron as Hero", *Drama*, Winter, 1960, p. 37.

(13) Marowitz, Charles. "Heroes and Un-Heroes", *Drama*, Spring, 1961, p. 41.

(14) Esslin, M. op. cit. p. 215.

(15) Leech, Clifford. "Two Romantics : Arnold Wesker and Harold Pinter", *Contemporary Theatre* (Edward Arnold, 1962), p. 26.

(16) Taylor, J.R. *op. cit.* p. 258.

(17) Pinter, H. *op. cit.* p. 174.

(18) Esslin, M. *op. cit.* n. 214.

(19) Hoefer, Jacqueline. "Pinter and Whiting", *Modern Drama*, Vol. 4, No. 4 (Feb., 1962), p. 403.

(20) Taylor, J.R. *op. cit.* p. 256.

(21) Donoghue, D. *op. cit.* p. 56.

(22) Leech, C. *op. cit.* p. 12.

(23) Kitchin, Laurence. *Mid-Century Drama* (Faber and Faber, 1960), p. 114.